

ここ数日、某日系チェーンスーパーの総経理によるインターネット上での発言が、大きな議論を呼んでいる。相手がこれまで公然と台湾支持の立場を示してきた以上、これほど激しい批判を受けるべきではないと考える人もいれば、問題の本質は「親台的であるか否か」にあるのではなく、人に不快感を与えるような態度やコミュニケーションのあり方にあるのだと考える人もいる。こうした状況を見て、私は台湾の街頭で決して珍しくない、ある種の現象を思い起こした。

一部の外国人、特に一部の日本人は、人通りの多い繁華街の路上で、「台湾ありがとう」「台湾最高」「我愛台灣」などと書かれたプラカードを掲げながら、本来は合法的な就労許可を取得していなければならないにもかかわらず、それを取得せずに路上パフォーマンス活動を行っていることがある。多くの台湾人はそれを新鮮に感じ、感動し、寄付や投げ銭という形で支援する。しかし時間が経つにつれ、そこに何とも言いがたい違和感を覚え始める人も現れる。

なぜなら、私たちは次第に気づき始めるからである。問題は「台湾が好きであること」そのものでは決してなく、人々に反感を抱かせるのは、ある種の人々が「親台」という姿勢を、あたかも道徳的な免罪符であるかのように扱っている点にあるのではないかと。まるで台湾への好意さえ示せば、自動的に特別待遇を受ける資格を得られ、さらには制度や規則、そして本来ならば検証されるべき自身の行為までも曖昧にできるかのような態度である。

言い換えれば、台湾人が本当に重視しているのは、「台湾が大好きだ」と声高に叫ぶ人々とは限らない。むしろ、「親台」をことさらに演出しなくとも、なお台湾社会を尊重し、台湾のルールを守り、台湾人を対等に扱おうとする人々なのである。

今回の件において、多くの人々が抱いた不満もまた、「彼が台湾を支持しているかどうか」に由来するものではない。むしろ、どこかに漂う微妙な優越感や、「自分はこれほど台湾を支持しているのだから、なぜ君たちはなお自分を批判するのか」という感情的な圧力に対する反発なのである。善意そのものはもちろん大切にされるべきだ。しかし、善意は免責の特権ではない。

真に台湾を尊重する人であれば、台湾社会が善意を受け入れる一方で、同時に批判する自由をも保持していることを理解すべきである。「親台」が他者に感謝を要求し、社会に受容を強いるような態度へと変質したとき、それはもはや単なる善意ではなく、次第に台湾そのものを消費する行為へと随っていくのである。